

群 教 セ	G06- 03
	令 6. 287 集
	特研 - 中

自分の思いを試行錯誤しながら 表現する生徒の育成

—おしゃべりしながら試す活動を通して—

特別研修員 男沢 紗代

I 研究テーマ設定の理由

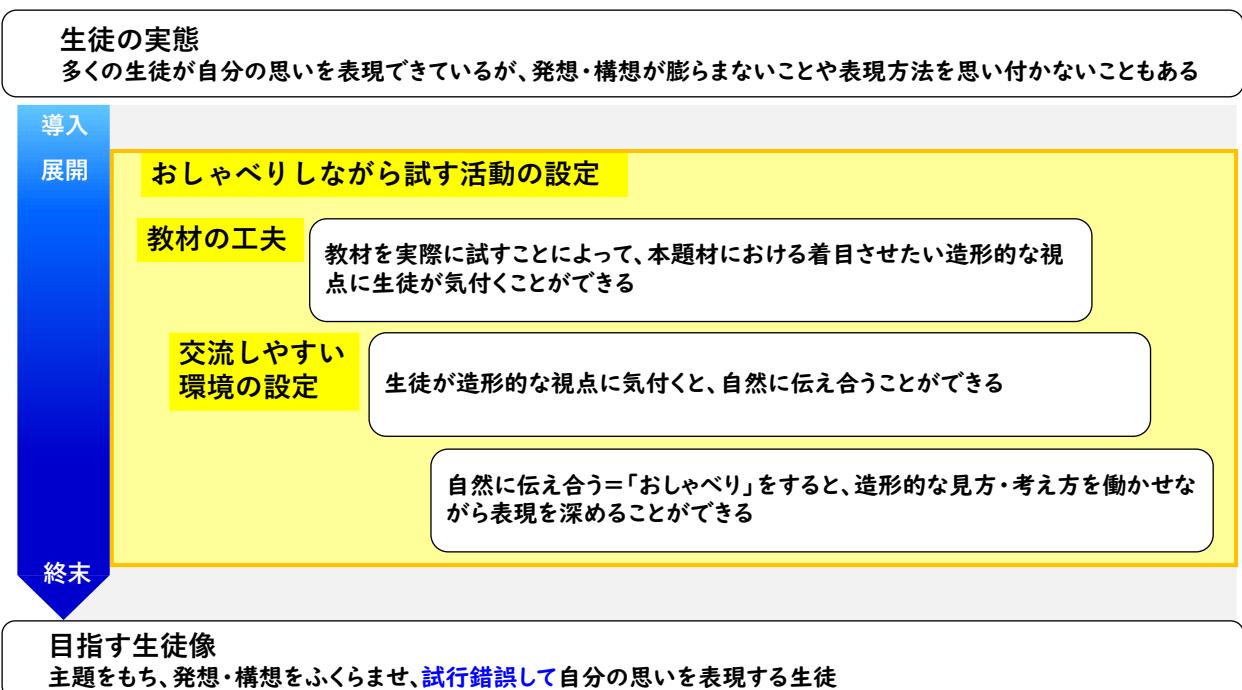
変化が激しく先行きも不透明なこれからの中を生きる子供たちに育成したい力として、「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）」に発表された。「エージェンシー」はその中心的な概念として、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力（the capacity to set a goal, reflect and act responsibly to effect change）」と定義されている。このように子供たちにエージェンシーを發揮させ、教師が「～させる授業」から、児童生徒が「～する授業」へ更新する必要がある。

これまでの授業では、思いをもち自ら試行錯誤して表現方法を改善していく生徒もいたが、美術が苦手な生徒や表現することが苦手な生徒にとっては、授業を楽しんで主体的に参加できない傾向があった。

そこで、生徒が他者からヒントや助けをもらうことで、生徒同士で解決できるのではないかと考え、自分の思いを試行錯誤しながら表現できる生徒を育成することを研究テーマとして設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 研究上の手立て

発想が膨らまない生徒、思いはもっているけれども表現方法の思いつかない生徒が表現できるようになるためには、自分の疑問や課題に則した対話が必要であると考える。これまででは、自由に対話をさせると、着目させたい造形的な視点を基にした有効な対話がされなかつた。

生徒が自分の思いを表現できる姿とは、生徒が課題とするものを試しながら、見付けたことを自然に伝え合い自分の考えを改善していく生徒の姿である。これを実現するためにおしゃべりをしながら試す活動を取り入れた。生徒は、ただ鑑賞する作品を見たり、作品を制作したりするだけでは分からぬことが、教材を使って試すことで感性を働かせて感じたことに気付き、そのことについて自然に伝え合う。そして、生徒の思考の深まりを教師が意図するねらいの方向に向かわせることができる。以上のことから、生徒が思いを試行錯誤しながら表現する姿を引き出すために、以下の手立てを実践していくことにした。

研究上の手立て

おしゃべりしながら試す活動の設定

生徒が教材を試すことで造形的な視点に気付くと、自然に伝えたくなる。伝え合う=「おしゃべり」をすると、造形的な見方・考え方を働かせながら表現を深めることができる。

手立て1 交流しやすい環境設定

机の向きや配置、材料を置く位置や発表者の位置、生徒の動きやすい動線にも配慮した環境の設定を行うことで、試して感じたことを自然におしゃべりし、気付いたことを共有したり、更に深めたりすることができる。例えば、馬蹄形の班の配置をすることで、どの机からも黒板とモニター、発表者が見やすくなる。どの机からも見やすい机の配置にすることで、タブレット端末が背中合わせにならないので、画面を見ながら話ができる。

手立て2 教材の工夫

実際に教材を手に取って試す活動を取り入れることで、考えただけや見ただけでは得られないことも感じられるようになる。さらに、試して感じたことについて友達と自然発生的におしゃべりをすることで、自分の考えが整理されたり、自分にない視点を取り入れて自分の考えを広げられたりする。

III 実践例

1 題材名「だからお札になったのだ！」（B 鑑賞 中学校第3学年）

本題材では、造形的な視点の中でも特に構図に着目させるために上記の手立てを行った。教師が視点を提示するのではなく、生徒がおしゃべりしながら試すことで自ら視点に気付き、考えを深めていくことができた。以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 余白や空間の効果、立体感や遠近感、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解する。（知識及び技能） (2) 日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、造形的なよさや美しさを感じ取り、表現の意図と創造的な工夫、美術文化について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。（思考力、判断力、表現力等） (3) 美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に美術作品や美術文化などの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとする。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1) 余白や空間の効果、立体感や遠近感、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。 (2) 日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、造形的なよさや美しさを感じ取り、表現の意図と創造的な工夫、美術文化について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。 (3) 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に美術作品や美術文化などの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとしている

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を最初に見て感じたことを言葉にする。 ・作品を初めて見た印象を書いて黒板に貼る。
追究する		<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川沖浪裏の波と富士山の一番よい構図を撮影し、なぜ北斎はこの構図で描いたのか推測する。 ・神奈川沖浪裏をプリントアウトして波と富士山を切り取り、富士山が一番よく見える構図で撮影する。このとき、時、富士山と波の大きさのバランスについておしゃべりしながら活動を行う。その後、何班か発表し、全体に共有する。
	第2時	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに、インターネットを使って調べ、新たな魅力について発想を膨らませながら伝え合う。 ・美術文化について知りたいことを、インターネットを使って調べ得たことを基に絵の価値について話し合う。最後に、何班か発表し全体に共有する。
まとめる		<ul style="list-style-type: none"> ・美術文化について気付いたことを全体に確認し、個人の意見をロイロノート・スクールに入力する。 ・2時間通して気付いたお札になる程の絵の魅力について自分の考えを入力する。

2 授業の実際

【つかむ】

第1時の導入で、絵を初めて見た感想を一言で書き、黒板に貼る活動を行った（図1）。富士山の小ささに注目した生徒、波の激しさが目に入った生徒、日本らしさを感じた生徒が多かった。

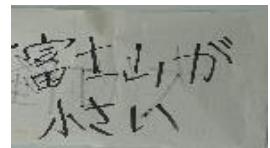


図1 初発の感想

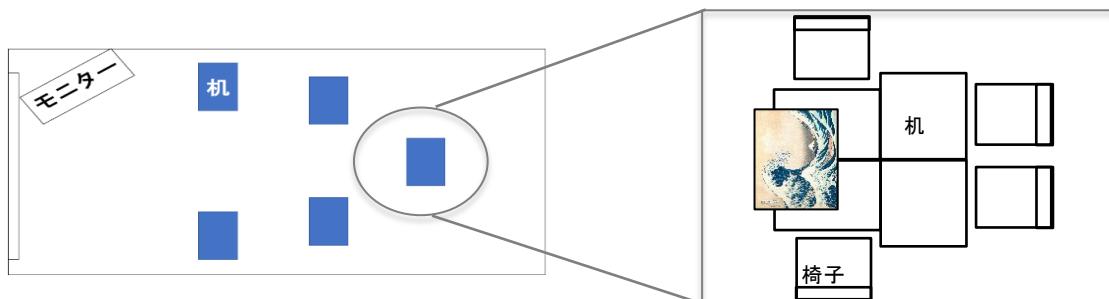
【追究する】

研究上の手立て

波と富士山を切り離した教材を用意し、その配置を試してタブレット端末で撮影する活動

手立て1 交流しやすい環境の設定

全員が黒板・モニター・発表者を見やすい、馬蹄形の班の配置とどの席からも絵が見やすくタブレット端末を見ながらでも対話しやすい机の向き



手立て2 教材の工夫

配置を繰り返し試せる、「神奈川沖浪裏」の作品を富士山と波を切り離した教材



造形的な視点の中でも特に構図に着目して絵を鑑賞するために、おしゃべりしながら試す活動として波と富士山を切り離し、その配置を試してタブレット端末で撮影する活動を取り入れた。図2、3

は生徒が構図を繰り返し試す姿である。試しながら感じたことを自然に伝え合っている様子が見られた。富士山を大きくすると波の迫力がなくなると感じたり、余白も失われバランスが悪いことに気付いたりした。また、富士山が小さいまま目立たせるために波の真下に富士山を配置したりしていた（図4）。この活動を通して、生徒は、波と富士山の大小や動静の対比、波が落ちる付近に富士山を配置し視線を誘導していること、遠近法などの構図の工夫に気が付いた。

【まとめる】

その後、おしゃべりしながら試す活動で気付いたことを話し合い付箋を絵の周りに貼って発表した。生徒は、三つの構図の工夫（富士山への視線の誘導、遠近法、富士山と波の対比）について気付いたことや見付けたことを学級全体で共有した。その際、生徒は、構図以外の工夫（版画、単純化した線、リピテーションなど）に気付くことができた。

最後に、神奈川沖浪裏の魅力について自分の考えをまとめてタブレット端末に入力をした。記述の中には、初発の感想からの見方や考え方の深まりや、構図に着目したこと、他の造形的な視点についての発見について言及が見られ、作品の魅力に対して自分なりに迫れたことが伺える。

3 考察

想定した本題材の目標を達成した姿は、作者の意図、造形的な視点（富士山への視線の誘導、遠近法、富士山と波の対比）、自分の考えが言える生徒を設定していたが、全員がこちらを達成することができた。

おしゃべりしながら試す活動を行ったことで、生徒は構図について試して自然発生的におしゃべりし、構図の工夫に気付くことができた。そして、共有した構図の工夫が何のために行ったか作者の意図を考えることができた。

このように、生徒は主体的に構図の工夫に向かって考えを深められた。この姿を引き出すために、交流しやすい環境設定と構図に着目させるための教材を取り入れた「おしゃべりしながら試す活動」が有効だったと考える。

初めこの絵を見たときは「こんなところに富士山あったんだ。」「なんで富士山を小さくかいたんだろう」と疑問に思っていたけれど、他の人の意見を通して、波の流れを工夫することで、自然的に富士山に目がいくのだと分かりました。また無駄なところがひとつもなく、色の工夫や遠近法など全体にまとまりに魅力を感じました。

図6 生徒の振り返り

IV 研究のまとめ

1 成果

おしゃべりしながら試す活動を設定したことで、生徒は試して感じたことを伝え合いながら、自分の考えを整理したり広げたりして造形的な見方・考え方を働かせて表現を深めることができた。おしゃべりが活発に行われたのは、環境設定が有効に働いたからである。また教材の工夫により教師が意図した視点に向かって考えや表現を深めることができた。こちらは、教師の適切な発問が不可欠である。以上のことにより、生徒は試行錯誤して自分の考えや思いを表現することができた。

2 課題

これから、様々な授業でこの手立てを取り入れていきたい。この手立ては、目的によって環境設定を変えていきたい。また、教師が手立てを行う際には観点を精選していく必要がある。



図2 構図を試す姿



図4 富士山と波の配置による感じの変化

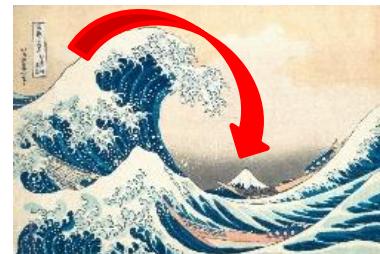


図5 生徒が気付いた視線の誘導